

Title	子どもの死の概念について
Author(s)	赤澤, 正人
Citation	臨床死生学年報. 6 P.130-P.137
Issue Date	2001
Text Version	publisher
URL	https://doi.org/10.18910/7513
DOI	10.18910/7513
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

子どもの死の概念について

赤澤 正人

Key words : 死の概念、子ども、認知発達

1. はじめに

かつての日本社会では、人々は家庭の中で老い、衰え、そして死を迎えていた。家族が最期を看取することは、どの家庭でもごく自然なことであり、死に対する心構えを学ぶ良い機会でもあった。しかし現在では、多くの人が病院や施設の中で死を迎えており、死について学ぶ機会は失われつつあると言える。死が非現実的なものになりつつある中で、メディアやゲームが与える間接的で一方的な死が、子どもに及ぼす影響についての議論がなされている。痛みや苦しみを伴わない仮想現実の死を体験することによって現実との区別が付きにくくなっているとの指摘(坂元、1999)や、近年増加している少年犯罪や事件との関連性を指摘する声がある(目黒区青少年問題協議会報告書、1998)。子どもの心の荒廃が懸念されている現在、「心の教育」が提唱されているが、同時に「生と死の教育」の必要性も高まってきているといえる。生と死の教育は、子どもに不安や恐怖を与えるのではなく、生きていることの大切さや生かされていることの尊さを体験させることが目的である。アメリカでは1970年代以降、デスエデュケーションに関する多くの研究がなされているが、日本ではまだまだ未発達であり関連した研究も少ない。生と死の教育を行う上で子どもの発達段階や、死に対する考えや概念を理解しておくことは、非常に重要であり必要不可欠なことである。そこで本論では、子どもの死の概念に関する内外の知見を概観する。

2. 死の概念の構成要素

Speece & Brent (1984) は、大人の成熟した死の概念として、不可逆性 (Irreversibility)、無機能性 (Nonfunctionality)、普遍性 (Universality) の3つを挙げている。また Smilansky (1987) は不可逆性、最終性 (Finality)、不可避性 (Inevitability)、因果性 (Causality) の4つを挙げている。死の概念の構成要素は、論者によって扱う数と名称が異なっている。各研究の構成要素を吟味した結果、Smilansky (1987) が提唱した4要素にまとめることが妥当と思われた。ここではその4要素に関して詳しく取りあげる。

①不可逆性 (Irreversibility) — 生きているものが一度死ぬと、その肉体は二度と生き返ることはできない。生物学的成長の変化や、以前の状態に戻ることは不可能であるということ (Smilansky, 1987)。変更不可能性 (Irrevocability) と呼ぶ論者もいる (Kane, 1979; White, Elsom, & Prawat, 1978)。Gartley & Berhasconi (1967) は、死は最終、Koocher (1974) は、死は永遠としてその不可逆性を述べている。この不可逆性の概念は、死後の霊

的な存在を信じる考えとは異なる (Speece & Brent, 1987)。

②最終性 (Finality) - 肉体機能、新陳代謝、感情、動作、思考といった、生きている時に行っていること全てが死によって終わるということ。Kane (1979) は死の最終性を、動かないこと (Immobility)、肉体が機能しなくなること (Dysfunctionality)、精神的・感情的な反応がなくなること (Insensitivity) の3つに分けて考えている。機能の停止 (Cessation of function) (Townley & Thornburg, 1980; White et al, 1978) や無機能性 (Nonfunctionality) (Speece & Brent, 1984) と呼ぶ論者もいる。

③不可避性 (Inevitability) - 自分も含めて生きているものは全て、いつかは必ず死ぬということ。普遍性 (Universality) と呼ばれることがよくある (eg. Childers & Wimmer, 1971; Kane, 1979; Speece & Brent, 1984)。Smilansky (1987) は、不可避性には、全ての人が持つ死の運命、自分が持つ死の運命、加齢 (Old age) の3つの側面が含まれているとしている。そして加齢 (Old age) を、生物学的成長の流れと死の理解であると定義している。

④因果性 (Causality) - 死には肉体的・生物学的な要因があるということ。これは Smilansky & Weissman (1978) が提唱した概念である。人が亡くなった場合に、残された人が自分を責め、罪悪感に駆られることがある。概して子どもの方が大人よりも罪悪感を覚える度合いが大きい (グロルマン、1994)。因果性を理解することは、そうした子どもの苦しみを和らげる助けになるとの指摘もある (Smilansky, 1987)。Orbach, Gross, Glaubman, & Berman (1986) の研究では、因果性は子どもにとって最も理解することが困難な要素であり、経験や成長が必要だとしている。これは White et al (1987) の研究結果とも一致し、彼らは因果性を科学的な概念としている。

3. 子どもの死に対する考え方と死の概念の獲得年齢

子どもが死の概念を獲得する年齢は異なり、死に対して特徴的な考えを持っていることは、多くの研究から明らかである。ここではそうした研究を概観していくことにする。

3-1. 幼児

幼児は死という言葉そのものを理解できないかもしれないが、自分はひとりぼっちにされるのではないかという不安を常に抱いている (グロルマン、1992)。5歳以下の子どもにとって、死は愛するものからの分離 (Separation) と同義語であるといわれており、子どもなりに考えた死を体験している。「いない、いない、ばあ」は、子どもに瞬間的な分離不安を起こさせ、その後安心させて喜びを与える遊びであるといえる (西村、1986)。東京都立教育研究所が行った『子供の「生と死」に関する意識調査』(1983) では、「死ぬとはどのようなことか」という質問に対して「動かなくなる」、「車にひかれる」、「血が出る」、「ピストルでうたれる」など自分が見聞きしたことを具体的に回答していた。死に対する感じ方や考え方では、約7割の幼児が「死ぬのはいやだ」と感じ、約8割以上の幼児が「死ぬのはこわい」と感じていた。生命についての考え方の調査では、幼児は「動く・動かない」、「呼吸する・

しない]、「手足がある・ない」といった目に見える現象を生物・無生物の識別の根拠としている。また事物に意識や生命があるとするアニミズムの考えを持つ幼児の比率は非常に高く、特に女子にその傾向が強い。そして生命が有限であるという考えは、幼児においては不確かであるという結果が出ている。これらの結果から幼児期における「生と死」に関する意識は、未確立の段階であり、幼児から小学生低学年にかけては「生と死」の認識が急激な深まりをみせる重要な発達段階であると考えられる（宮本、1986）。

3-2. 小学生

ひと口に小学生といっても7歳から12歳と年齢に幅があり、小学生全体としてみていくには少し困難がある。そこで年齢に大まかな区切りをつけて述べることにする。

5歳から9歳の子どもの場合、死ぬと再び生き返ることはないということを認識するようになるが、死は自分の身には起こり得ないものとして考えている（Kane, 1979; Nagy, 1948）。死の存在を否定しているわけではないが、自分のこととしては考えられないようである。10歳以上になると現実に即した死の概念が持てるようになり（グロルマン、1992）、死の普遍性と肉体機能の停止を理解し、死の概念は成熟したものとなる（White et al., 1978）。

上述した東京都立教育研究所の調査（1983）によると、小学校1年生から2年生の頃に生命に有限性に関する認識がほぼできあがる。しかし、「また生き返ってこれることができる」とか、「赤ちゃんになって生まれてくる」という考えが心のどこかにあり、再生の願望を持っていることがわかる（稲村、1986）。再生願望については、4年生以上の各学年とも5割以上が肯定的に捉えている。その理由には、やり直しを望むものや未来への関心を示すものがある。生物・無生物の識別では、「考える・考えない」は1年生から、「心がある・ない」は4年生から識別の根拠としている。「手足がある・ない」は3年生以上ではほとんど根拠となっていない。また、「死ぬのはいやだ」と思う児童はどの学年でも7割以上、「死ぬのはこわい」と思う児童は8割以上いた（稲村、1986）。

3-3. 死の概念の獲得年齢

死の概念の獲得年齢に関しては数多くの研究がなされている（eg. Anthony, 1940; Kane, 1979; Koocher, 1973; Nagy, 1948; Speece & Brent, 1984）。Nagy (1948) の調査結果では、3歳から5歳の子どもは、死の不可逆性を理解することができず、死は別離や眠りと同じで一過性の出来事として捉えている。5歳から9歳にかけて、子どもの死の概念はより具体化しないし擬人化されたものとなり、死の最終性や因果性を徐々に理解するようになるが、死は自分には起こり得ないものとして考えている。9歳以上になると、死の最終性と普遍性を理解し、大人と同様の成熟した死の概念を獲得する。また Anthony (1940) の研究結果では、3歳から5歳の子どもは、死という語に無関心であり、限定されたあるいは間違っただ概念を持っているとしている。そして6歳から8歳の子どもは、死の儀式に関心を持つようになるが根本的な情報は持たず、9歳以上になると死の不可逆性や最終性を理解し、死という出来事を理解するとある。

3歳から5歳の子どもが持つ死の概念は、限定的で未発達であることは他の報告でも一致するところである（Childers & Wimmer, 1971; Melear, 1973）。Kalmback (1979) や Hornblum (1978) の報告では、5歳から7歳の間に死の不可逆性、最終性、不可逆性の概

念を獲得するとある。Melear (1973) や White et al (1978) の研究では、Nagy (1948) と同様に 9 歳以上になると、死の概念は成熟したものになるとある。しかし 5 歳の段階で、ほぼ成熟した死の概念を獲得しているとの報告もある (Lansdown & Benjamin, 1985)。

このように、死の概念の獲得年齢に差が生じる理由として、Speece & Brent (1984) は被験者数や解析方法、質問内容の難しさ、質問項目の違い等を挙げている。年齢によって変数を比較することは、心理学の分野だけでなく他の分野や統計的調査でも有効である。

しかしながら、死の概念の獲得には年齢よりもさらに興味深い要因があり、その一つが認知発達のレベルである (Speece & Brent, 1984)。

4. 死の概念の獲得に影響を及ぼす要因

子どもが死の概念を獲得していく過程には様々な要因があり、概念は単独では存在し得ない。死の概念化は認知発達のレベルと密接に関連していると言われる (Speece & Brent, 1984)。Kastenbaum (1967) は、子どもが死を正しく理解するには、正しい認知発達が必要不可欠であるとしており、認知発達と死の概念獲得の関係については数多くの報告がなされている (eg. Anthony, 1972; Blum, 1976; Hansen, 1973; Kane, 1979; Koocher, 1973; White et al, 1978)。そして、これらの研究は全て Piaget の認知発達を用いている。そこでまず、以下では Piaget の認知発達理論について詳しくみていくことにする。

4-1. Piagetの認知発達理論

Piagetは認知発達を感覚運動期、前操作期、具体的操作期、形式的操作期の4段階に区分している (Piaget, 1960 ; Piaget, 1969 ; Piaget, 1976)。

①感覚運動期—生後からおよそ2歳になるまでの期間。遺伝的装備 (反射・本能) のもとで行動する。認知では出発点において反射が問題となる。Piagetの重視する反射の一つに母乳を飲む反射がある。それは単一の刺激に対して単一の反応が生じるという反射ではなく、一連のまとまりを形成する反射の連鎖と言うべきものである。感覚運動の連鎖をPiagetはシエマと名付けた。シエマの同化・調節のメカニズムによって、自分の身体や周囲に関わる様々なシエマが獲得される。さらにシエマ間の手段・目的協応が行われ、感覚運動的知能が完成する。

②前操作期—感覚運動期以降およそ6歳から7歳までの期間。表象的機能 (Symbolic function) が出現し、それを基礎として言語が習得される。思考は伸びていくが、その思考は可逆的なもの (思考の最初の出発点に戻る) にはなっておらず一貫性を欠いている。認知面でも情意面でも、保存の欠如に相当する現象がみられる。場面の知覚的・表象的配置に左右されやすいため、多様な場面で一貫した思考を適用することができない。また主観と客観を分化することができない。自分が自分の行為に主観的価値を込めているのと同じように、相手もその行為に主観的価値を込めていることが十分にわかっていないために、表面的な結果のみで判断したり、規範を変えたりする。

③具体的操作期—7、8歳からおよそ12歳までの期間。思考の可逆性の獲得によって、見か

けの背後に一定の不変の保存を得るようになる。主体の状況、場面の状況、相手の状況の変化に関わらず、一定の価値を保存しようとする働きが子どもの中に現れてくる。その働きを Piaget は意志と呼んでいる。また思考の可逆性と保存を特徴とする様々な操作が組み合わせられて、認知に体系的な構造が備わってくるようになる。個々の思考が1つの体系に組織化されるのである。この操作期では、ある程度安定した形をとるようになるがまだ制約がある。それは、具体的な現実性しか考えることができない、物事を一般的あるいは形式的に考えることができない、一度現実を離れて可能なことを考えることができない等といった制約である。こうした制約は次の形式的操作の達成によって初めて克服される。

④形式的操作期—11、12歳からおよそ15歳までの期間。現実や具体的内容の束縛から自由になり、仮説演繹的方法がとられる。現実性のレベルにとどまっていた具体的操作段階に対して、今の現実性も含めた、全ての可能性を検討することが可能となる。認知体系は組み合わせ的思考が可能になるまで発達する。また現実の対象を扱うのではなく、それを含んだ命題を扱い、命題間の理論的關係を操作するのである。そうした命題論理や記号を用いて、矛盾のない観念の能力を発達させる。イデオロギー的感情が芽生え、人生における自分の人格というものを位置づけるようになり、将来の社会的役割や職業選択に対する方向付けを行うようになる。

4-2. Piagetの発達段階に基づく死の概念の獲得

死の概念の獲得と認知発達に関連は、研究者によって結果が異なるところである。例えば Kalmbach (1979) は、前操作期は死の概念の不可逆性、最終性、普遍性と関連があり、この発達段階の子どもはこうした概念を理解しているとしている。一方 White et al (1978) の研究では、認知発達と死の不可逆性、最終性の関連は無く、具体的操作期と死の普遍性の関連を報告しており、具体的操作期の子ども（保存の考えができる子ども）は、前操作期の子どもに比べて、死の普遍性を高い頻度で理解していると結論づけている。ただし Kalmbach (1979) と White et al (1978) の結果の相違には、被験者が行う課題の回数や、課題の正誤を判断する要素の違いが指摘されている (Speece & Brent, 1984)。次に、Nagy (1948) の調査結果を Piaget の発達段階に照らし合わせてみる。そうすると死の不可逆性を理解することができず、一時的なものとして捉える3歳から5歳の子どもは前操作期にあたり、5歳から9歳が具体的操作期になる。この時期の子どもは、死は最終的で誰にでも起こることを理解するが、自分の身には起こらないと考える傾向がある。死の最終性、普遍性を理解し、死の概念がほぼ成熟したものとなる時期の子どもは、形式的操作期にあたるのである。

4-3. 死の概念獲得に影響を及ぼす他の要因

子どもの死の概念獲得に影響を及ぼす要因の1つに死別体験が挙げられる。死別体験をした子どもは、死の普遍性を理解しやすいという報告がある (Kane, 1979; Reilly, Hasazi, & Bond, 1983)。Reilly et al (1983) は、離婚による離別や核家族であることは、死の概念の獲得に影響せず、死別体験が重要な要因であるとしている。Kane (1979) は、過去の死別体験が死の概念に影響を及ぼすのは6歳以前であり、7歳から12歳の子どもの概念には影響

しないとしている。一方Cotton & Range (1990)の研究では、過去に死別体験をした子どもは、死に関して正しくない概念を持つ傾向があった。その原因としてCotton & Rangeは、体験した死に対して詳細で正確な説明がされなかったことを予測している。Jay, Green, Johnson, Caldwell, & Nitschke (1987)は、3歳から6歳の子どものがん患者は、健康な子どもに比べてより正しい死の概念を持っていることを報告しており、Jay et alはその理由に、がん患者の子どもが、死に関しての詳しく正しい説明を受けたためであると予測している。

死の概念獲得に影響するその他の要因としては、知能、不安や恐怖、絶望感が挙げられている。例えばOrbach et al (1986)は、知能が死の概念の獲得に影響があることを示した。知能が高い子どもは死の概念を正しく理解しているというものである。Orbach et alは、認知発達と知能を近似したものとして扱ったため、納得のいく結果である。Roclin (1967)とYalom (1980)は、不安と恐怖が、否認という防衛的なメカニズムを用いることによって、子どもが死を理解する際の障壁となるとしている。Cotton & Range (1990)は、不安は死の概念に影響し、絶望感に影響しないと報告している。ただし絶望感が臨床場面での子どもの死の概念と関係していることを述べている。

5. 今後の課題

諸外国においては、デスエデュケーションに関する研究が盛んで、死の概念や教育プログラムを扱った研究が数多くなされている。日本でも徐々に生と死に関する教育の動きが見られつつあるが、欧米などで用いられているテキストや方法を直接持ち込むことは、多くの危険を伴うことを認識しておかなければならない。なぜなら諸外国のテキストや方法は、それぞれの国の宗教教育に立脚したものだからである。日本では死がタブー視される傾向があり、日本独自のカリキュラム作成は手探り状態であると思われる。そして子どもが死に関して持っている概念や考え方の研究も少ないといえる。東京都立教育研究所の調査(1983)は10年以上前のものであるが、その調査結果はテレビやゲームなどの非現実的な死にいつそう慣れてしまっている現在の子どもにもあてはまるかどうか調べる必要もあるのではないかと考えられる。

日本では生と死の教育の動きは始まったばかりである。その第一段階として、現在の子ども各年齢における死の概念や、その概念に影響を及ぼす要因を検討することは非常に重要である。その要因としては先行研究にもある発達段階や死別体験、不安や恐怖、現代特有の要因としてテレビやゲームが考えられる。そうした要因と、死の概念形成の関連を調べる研究によって、生と死の教育カリキュラムや、家庭での死に関する子どもとの会話に、何らかの有用な提言ができると思われる。よって今後、日本においても、この分野に関する更なる研究や調査が期待される。

6. 引用文献

- Anthony, S. 1940 The child's discovery of death. New York: Harcourt, Brace.
Anthony, S. 1972 The discovery of death in childhood and after. New York: Basic.
Blum, A. H. 1976 Children's conceptions about death and an afterlife. *Dissertation*

Abstracts International, 36, 5248B.

- Childers, P., & Wimmer, M. 1971 The concept of death in early childhood. *Child Development*, 42, 1299-1301.
- Cotton, C. R., & Range, L. M. 1990 Children's death concepts: relationship to cognitive functioning, age, experience with death, fear of death, and hopelessness. *Journal of Clinical Child Psychology*, 19(2), 123-127.
- デーケン, A. 1986 死への準備教育の意義—生涯教育として捉える。デーケン, A. (編) 死を教える (pp.1-62.)、メヂカルフレンド社。
- デーケン, A. 1992 生と死を考える十年の歩み 生と死を考える会 (編) 世界聖典刊行協会。
- Gartley, W., & Bernasconi, M. 1967 The concept of death in children. *Journal of Genetic Psychology*, 110, 71-85.
- グロルマン, E. A. 1992 死ぬってどういうこと?子どもに「死」を語る時 重兼祐子 (訳) 春秋社。
- Hansen, Y. 1973 Development of the concept of death: Cognitive aspects, *Dissertation Abstracts International*, 34, 853B.
- Hornblum, J. N. 1978 Death concepts in childhood and their relationship to concepts of time and conservation. *Dissertation Abstracts International*, 39, 2146A.
- 稲村博 1986 死への準備教育の場とそのあり方 小学校教育。デーケン, A. (編) 死を教える (pp.83-96.)、メヂカルフレンド社。
- Jay, S. M., Green, V., Johnson, S., Caldwell, S., & Nitschke. 1987 Differences in death concepts between children with cancer and physically healthy children. *Journal of Clinical Child Psychology*, 16, 301-306.
- Kalmbach, C. A. 1979 The relationship between the cognitive level of the child and his/her conception of death. *Dissertation Abstracts International*, 39, 5518B.
- Kane, B. 1979 Children's concepts of death. *Journal of Genetic Psychology*, 134, 141-153.
- Kastrenbaum, R. 1967 The child's understanding of death: How does it develop? In E. A. Grollman(Ed.), *Explaining death to children* (pp.51-88.), Boston: Beacon.
- Koocher, G. P. 1973 Childhood, death and cognitive development. *Developmental Psychology*, 9, 369-375.
- Lansdown, R., & Benjamin, G. 1985 The development of the concept of death in children aged 5-9 years. *Child: care, health and development*, 11, 13-20.
- 目黒区青少年問題協議報告書 1998 「マスメディア (テレビ) が青少年に与える影響について」 <http://www.city.meguro.tokyo.jp/ugoki/media/p2.htm#top>.
- Melear, J. D. 1973 Children's conception of death. *Journal of Genetic Psychology*, 123, 359-360.
- 宮本裕子 1986 死への準備教育の場とそのあり方 幼児教育と両親の役割。デーケン, A. (編) 死を教える (pp.64-82.)、メヂカルフレンド社。
- Nagy, M. 1948 The child's theories concerning death. *Journal of Genetic Psychology*, 73, 3-27.

- 西村昂三 1986 小児と死の世界。デーケン, A. (編) 死を考える (pp.215-238.), メヂカルフレンド社。
- Orbach, I., Gross, Y., Glaubman, H., & Berman, D. 1986 Children's perception of various determinations of the death concept as a function of intelligence, age, and, anxiety. *Journal of Clinical Child Psychology*, 15(2), 120-126.
- Piaget, J. 1960 The child's conception of the world. New York: Littlefield, Adams.
- Piaget, J. 1969 The child conception of time. New York: Ballantine.
- Piaget, J. 1976 The psychology intelligence. Totowa, N.J: Littlefield, Adams.
- Reilly, T. P., Hasazi, J. E., & Bond, L. A. 1983 Children's conceptions of death and personal mortality. *Journal of Pediatric Psychology*, 8(1), 21-31.
- Rochlin, G. 1967 How younger children view death and themselves. In E. A. Grollman (Ed.), *Explaining death to children* (pp.51-88.), Boston: Beacon.
- 坂元章 1999 テレビゲームは暴力性を高めるか 児童心理、53(2), 105-112.
- Schonfeld, D. J., & Kappelman, M. 1990 The impact of school-based education on the young child's understanding of death. *Journal of Developmental and Behavioral Pediatrics*, 11(5), 247-252.
- Smilansky, S. 1987 On death: Helping children understand and cope. New York: Peter Lang.
- Smilansky, S., & Weissman, T. 1978 A guide for rehabilitation workers with orphans of war casualties and their mothers. Jerusalem: Henrietta Szold Institute.
- Speece, M. W., & Brent, S. B. 1984 Children's understanding of death: A review of three components of a death concept. *Child Development*, 55, 1671-1686.
- 東京都立教育研究所 1983 子供の「生と死」に関する意識の研究。
- Townley, K., & Thornburg, K. R. 1980 Maturation of the concept of death in elementary school children. *Educational Research Quarterly*, 5, 133-157.
- Yalom, I. D. 1980 *Existential psychotherapy*. New York: Basic Books.
- White, E., Elsom, B., & Prawat, R. 1978 Children's conceptions of death. *Child Development*, 49, 307-310.